
泡沫

くじら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫

【Nコード】

N1608A

【作者名】

くじら

【あらすじ】

組織が壊滅した。あれから月日が流れてた今でもまだその根は生きていた。

1. プロローグ

「マスター、コーヒーお願いね。」

「はいよ。」

ここは杯戸駅の裏路地にある古びたコーヒーハウス。

今日も客は居なかった。

無愛想なマスターのせいかな、今までお客を1人か2人しか見ていない。

よく店がもっていると感じしてしまう。

カウンターに座ると、マスターがコーヒーメーカーの

アルコールランプに火をともし。

その炎は青く優しく揺れながら、

サイホンの底を覆う。

中に入れた水はチツチツと微かな音をたてた。

泡が水面に上がり、消えてゆく。

自分の存在を主張する暇もなく儂くも潔く。

長い宇宙時間で考えれば人間の人生なんてこんなものかもしれない。

それなら精一杯やって胸を張って消えてしまいたい。

これが終わりさえすれば、後のことはどうでもいい。

コーヒーの香りが漂ってくる。

「お待たせ、しました。」

「ありがとう。」

マスターはコーヒーを出すと、また自慢のカップを磨き始めた。
必要以上に会話をしない。

初めての客も、常連に対しても態度は変わらない。

ただコーヒーを出すだけ。

店内ではアナログ盤のJazzがプチップチツと雑音を混ぜながら流れている。

煮詰まったときに、この空間が安らぎの時を与えてくれた。

モニターに映っていた膨大な化学式は一度はまとまってくれたのに、残された時間も解らない。

炎の消える瞬間を迎えているのかも知れない。

データがまた足りない。

慎重に研究を進めていたはずだ。

ここへ来てなぜつまずくの。

簡単には完成させてくれない、このままじゃ何もしないのと同じ。しかし落ち込んでばかりはいられない。

さてとそろそろ部屋に戻ろう。

また黙って出かけたなんて怒られないうちにね。

「マスター、おいしかったわ。」

「また、どうぞ。」

無表情でマスターは言った。

いつまでこの店でコーヒー飲めるかな。

そんな時間が残っていることを信じて志保は店を後にした。

1 プロローグ（後書き）

初連載です。

そして「真っ向くじら」から「くじら」になって初作品となりました。

重い雰囲気のお話ですがお付き合いくださいませ。

2・組織の残党

「では、わたしはこれで失礼します。」

「ありがとうございます。ご苦労さん。」

明日は息子夫婦が来ることになっている。

来週は出張があるから、週末にまた頼むよ。」

6時をまわった頃、まだ外は明るかった。

中西化学の社長の屋敷からお手伝いさんが帰っていった。

ここは閑静な住宅地。

大きな屋敷が続いている。

会社の会長宅や大使館などもあり、警備員を雇っているところもある。

男はお手伝いさんが帰るのを確認すると、見送った家主が部屋に戻るのを待っていた。

「じゃましてるぜ中西。」

大きな屋敷に一人暮しとは寂しい生活してんだな。」

男は応接間の椅子に腰掛けていた。

「ウオツカ！待っていたよ。」

今日は彼女を早めに帰したんだ。

あの新聞広告でわかるとは、さすがだな。

おれもおまえも組織の仲間じゃないか。

その帽子や手袋を外したらどうだ。」

「くせだね。なかなか外せないんだ。

それで、おれに何の用があるんだ。」

「そう急くな。」

確かにおれはコードネームさえ持てなかった。

しかし、組織が崩壊した今、残党を援助しているのは

わたしたちだと言うことを忘れてほしくないな。」

ウオツカがタバコに火をつけた。

ヤツがタバコを吸うのは落ち着こうとしている証拠。

中西はやはり今のウオツカが追い込まれていると思っていた。

話を自分のペースで進めることが出来ると信じていた。

組織は崩壊した。

それはあまりに脆く崩れた。

死んだはずの工藤新一、高校生探偵の服部平次と裏切り者のシェリ
ー。そしてFBIの赤井。

たかが4人に振り回されている間に、FBI、警察に押さえられた。
半世紀以上も続いた組織が壊滅されるなどと考えられなかった。

ボスはドサクサに紛れた誰かに撃たれた。

犯人の目星はまだついていない。

日本の警察も捜査に行き詰まっている。

ジンの兄貴とベルモットは何があつたか知らないが同士討ちした。

その上爆発したアジトから逃げ遅れて警察に捕まり、

惨めな姿を公にさらしてしまった。

兄貴は未だ黙秘を続けている。

しかし、裁判は始まった。

残党は生き残った実行部隊と特殊処理部隊の連中と資材調達部の一
部と資金調達部の小者連中。

結束が緩んでばらばらに行動している状態だ。

ウオツカを中心とした実行部隊の9名は未だ強く結束しているが、
ジンを煙たく思う者、他の部署にいた者はこの仲間に入ってこない。

コードネームを持っていた者達は公安の残党狩りに怯えている。

「忘れちゃいないさ。」

コードネームは腹の足しにはならねえってことだろ。」

苦味つぶした顔を隠して答える。

「わたしは組織の再興を考えていましたね。」

我々の代表者をボスとして担いでもらえませんか？」

ウオツカは中西のバックにいそうな奴らを思い浮かべたが絞りきれない。

野心の大きいだけの小者ばかりで結論は出せないでいた。

「その前にどう言うことなんだ。」

あんたの会社は外資に買収されることが決まったらしいな。

あそこは敵対する組織の息が掛かっているはずだ。

組織の再興なんてよく言ったもんだ。

それにおれはボスの後任は兄貴が担いだ者しか認めないぜ。」

「秘密裏にしていた事をご存知でしたか。」

その通り明後日に調印し、電撃的に発表します。

わたしは社長職を外されますが、

まあ、相談役も似合う歳になりましたからね。

裏でも表でもわたしは生き続けるんですよ。

裏のデータは抹消されちゃいない。

我々との接点が切れてるが、

裏の世界にドップリ浸かっていたあなた達がマークされていることを忘れないことですな。」

脅しにかかればジンのいないウオツカなんぞ組みやすい。

「わたしにはジンやベルモットを使いこなせるほどの力量はない。何を考えているのか解らないことが多すぎますのでね。」

このまま消えてもらいましょう。

しかし、忠誠心の強いウオツカくん、あなたの能力は買っていますよ。

我々と一緒に鞍替えしませんか。

そして、まず生き残るんだよ。

我々の組織として復活する時を待つのです。

それには実行部隊は必要不可欠ですから。

あちらの条件は2つ。

工藤新一の暗殺とシェリーを引き渡すこと。

工藤新一の件は特殊処理部隊のカシスに、

シェリーの件は今まで通りあなたの仕事ですよ。」

「シェリーのような天才はなかなかいないから分かるが、いまさら探偵1人を殺って士気を高めるとも言うのか。」

ウオツカは手を広げて呆れた素振りを見せた。

「彼らが日本で勢力を広げるのに危険な芽は先に摘んどくと言っことですよ。」

組織崩壊の敵討ちとでも言えますし、工藤新一は野放しにしてはおけないでしょう。

その後、服部平次の処分も考えなくてはならないかもしれませんね。アポトキシンのデータで大したモノは残っていない。

残った薬もFBIが回収している。

あとはシェリーの頭の中だけです。

彼女にはさらに薬の研究を続けさせましょう。

アポトキシンは向うの組織も欲しがっていますからね。」

中西は水の入ったコップを用意して薬の包みを開け始めた。

「薬を常用するとは先も長くないんじゃないのか。」

年は取りたくないもんだ。」

「憎まれ口を利いても良い身分でもなかるうに。」

「おれはまだ返事をしてないぜ。」

ウオツカは片肘をテーブルにつけて言う。

「カシスは賛成してくれたのですよ。」

わたしを殺れば、あなた達が狙われることになる。

情報を警察に流すこともできますよ。」

薬を口に入れ水を流し込んだ。

「言ったらう。先も長くないんじゃないのかって。」

中西は小さな唸り声とともに崩れ落ちた。

「体が熱い。まさかアポトキシンか。まだ残っていたのか。」

息絶えたのを確認するとウオツカは部屋を去った。

ウオツカは車に戻ってきた。

逃亡時に使った兄貴の愛車。

まだ思うように操る事が出来ず駄々を捏ねられる。

「兄貴、組織の裏切り者は始末をさせてもらいますぜ。」

ウオツカはそう呟くと部下に指示を出した。

「中西化学のメインコンピュータを爆破だ。

しかし、組織関連のデータは回収しておけ。

そうだボクを連れていけ。あいつならそのくらい取り出せるだろ。

あと中西さんところの息子が米花町に住んでいたはずだ。

始末しろ。こっちはハデにやるなよ。」

カシスのやろう。

アメリカから戻ってこそそそ動いていると思ったら、こいつと組んでいたのか。

待てよ、米花町と言えば工藤新一がいる。

「おい、カシスを見かけたら接触するな。

後をつけて根城を調べて報告しろ。」

カシスも兄貴に憧れていた男だったが、

いつのまにかライバル視しはじめた。

ボスは頼りにしていたが、傍には置かなかった。

それを兄貴のせいだと吹き込んだ奴もいた。

奴は利用されるだけ。

工藤を殺れば、カシスは敵対組織に炙り出される。

シエリーだってFBIが連れてったじゃねえか。

俺達をやつらの本部のあるアメリカにわざわざ来いと言うのか。

直接争っていた実行部隊が寝返ったって信用される訳はない。

始末するに決まっている。

兄貴ならどうする？

しかし今の自分達に兄貴を奪還しても、逃げおおせるほどの力はな

い。

今のオレはただ兄貴の帰る場所を維持しているに過ぎない。
ついて来た連中はオレに何を期待してんだろうか。

兄貴みたいなカリスマ性を持たないオレに何が出来るのだろう。
サイを投げちまった。

大勝負に自分を賭けるしかない。

ウオツカは冷たい汗をかきながら、タバコに火をつけた。

「生き残る・・・必ず。」

しばらくすると屋敷は炎を上げた。

3・組織との再会

「ありがとう工藤くん。車で送って行こうか。」

「いえ、寄るところがあるんで。ここで失礼します。」

帰国してから初めて警視庁から要請された事件が解決した。

佐藤刑事に丁寧な断り、現場を後にする。

春の陽気に誘われてと言っても、夜はまだ冷える。

散歩がてら歩いて行くことにした。

約束された時間にはまだ時間がある。

月の光に浮かぶ桜を見上げ、思わず笑みを浮かべる。

「あいつは、今頃なにしてんのかな。」

最後に会ったのは桜が舞い散る中だった。

その姿を思い出しながら歩き出す。

この春からオレも大学生になる。

治療のせいでみんなとは1年遅れたが、仕方がない。

それぞれ自分の道を歩き始めたのだから、

なかなかみんな揃ってと言うわけにはいかない。

蘭は組織の事件を思い出して、

探偵業を再開するのに良い顔をしなかった。

しかし、大バカ推理之介は誰にも直せないと諦めていた。

必ず家に帰ったら電話をすることを約束させられた。

そんな制約も心地よくも感じていた。

車の免許もこの春に手に入れた。

博士のビートルをたまに借りている。

ついでにバイクの免許も取っておいた。

渋滞の多い幹線道路を考えると、バイクの方がいいと思っている。

服部に話したらすぐに上京して、バイクの発注からなにからやってくれた。

和葉さん曰く、「自分が欲しいの、選んだだけや。」と言っていた。相変わらず仲良い2人だ。

そういえば納車日を忘れていた。

まあ無くなっちゃう訳でもないし、歩くのも嫌いじゃないし。

『体のためには歩いたほうがいいのよ。』

あいつはそんなことも言ってたっけ。

最近やつと体調も落ち着いたみたいだ。

見上げた先の桜の木が光った。

いや、その先のノッポビル。

ものすごい爆音と共に火の手が上がる。

地面も少し揺れた。

「地震だ！」

人々の叫び声も続く爆発音に掻き消されていく。

近所の住人も外へ出てビルのほうを見る。

遠くでサイレンの音がした。

新一は野次馬の中を縫うように現場に走って行く。

どう見てもただの火事じゃない。

爆破事件だとしたら、誰が何の為に。

燃えるビルはツインタワービルでの一件を思い出させる。

あれは証拠隠滅が目的だった。

途中の路地で黒い影を感じた。

・・・誰かがいる。

野次馬なのか？

事件関係者なら人ごみの中に紛れて逃げるだろう。

犯人なら不注意に身をさらす事はしないはずだが、

気になってその方向に足を向けた。

少し離れた通りに出ると、黒服の男が車に乗り込もうとしていた。

遠くで人の声は聞こえるが、この辺りは他に人影がない。

なんでここに都合の良いエリアが出来たのだろう。
用意周到な計画。黒服の男。

確証はないがそう感じずにはいらなかった。

「まさか、また奴らが動き出したのか。」

ゆつくりと慎重に車に近づく。

昔やったミスを思いだす。

いやな汗が背中を伝う。

あの時は後ろをジンに取られた。

微かに人の気配を感じた。

右手で麻酔銃のスコープを開くと、後ろを振り向いた。

ゆつくりと銃を構えた男が近づいてくる。

「久しぶりだな。探偵坊主。」

「ジ、ジン！？おまえはまだ拘置所にいるはず。」

新一に向けられた銃は男の右手にある。

「違うな、何者だ。ジンの格好をして現れるなんて。」

「顔をまだ見られたくないのですね。今日は挨拶に来ただけさ。」

男は新一から目を離さずに銃を車に向けた。

その隙に麻酔銃を向けかけたときに例の発作が始まった。

いくら踏ん張っても膝から力が抜けて行く。

「この一週間ほど君を観察させてもらったよ。」

名推理と言うものもを聞かしてもらった。

確かに切れ者と聞いていた通りだな。

しかし、戦いは頭脳戦だけじゃないんだぜ。

その体でどうするつもりだ。

アポトキシンからは逃げられないのさ。」

男はうす笑いを浮かべながら男達と車のガソリントankを打ちぬいた。

車は炎上して中の男達が炎に包まれた。

「こいつ。」

まずいつ！発作が始まると焦点が定まらない。

すると男の銃が弾かれ足元に転がっていた。

「派手な登場をしてくれるな。」

炎が銃を持った別の男を浮かび出した。

「赤井さん！」

はつきりと姿は見えないが、その声は忘れることはない。

「貴様が組織の残党だってことは知ってる。

せつかくだから名前くらいは聞かせてもらおうか。」

赤井は去ってゆくもう一つの人影を目で追いながら言う。

「ふん、ボスやベルモットが恐れたシルバートレット。

まとめてこのカシスが処分してやるよ。

しかしジンを崇める連中の目を覚まさせるのが先だな。

また今度相手をしてやるさ。」

炎に包まれた車が爆発を起こした。

大きな音と共にカシスは消えていた。

車の走り去る音が聞こえた。

「工藤、しつかりしろ。例の薬はあるのか？」

「追わないのかつ赤井さん！」

「手は打ってある。」

「そ、そうか。さすがだな。」

薬は取りに行くところなんだ。」

「新出のところだな。立てるか？」

今、連れてってやる。」

赤井が踏み出した足が何かを踏んだ。

「コンタクト？おまえ目が悪かったのか？」

「ああ、これは受験勉強の副作用さ。」

「それならいいんだが。」

「よくないさ。メガネはかけたくないんだ。」

新一は毎月第2週と4週の日曜日の夜に新出医院で検査を受けていた。

一般診療の終わったあと、8時くらいに行くことになっていた。組織の事件に関わった新出先生はアポトキシンの存在を知ってしまった。

もちろん、その開発者もその人間の哀しみも知っている。

アメリカの研究機関と極秘提携し、

FBIの日本での組織関連の極秘捜査の協力要請を受け入れた。

アポトキシンを公にしたくない思惑と彼の正義感が手を組んだ。

おかげで新一は日本に戻れることとなり、新出医院で治療を受けることになった。

そんな大きな事に巻き込まれていても、新出先生は全く変わらない。彼はどんな立場でもいつもの優しいお医者さん。

有名な名探偵と評判の良い医師のコンビ。

近所の誰もがホームズとワトソンの名コンビと重ねていて、定期的に通う姿に不信に思う者はいなかった。

「赤井さん、何をしに日本に来たんだ。」

日本での組織の残党狩りは公安の仕事だろ。」

新一は警察に通報した赤井に話しかけた。

「別件さ。俺たちはヤツラだけが相手じゃない。」

赤井は新一に肩を貸すと、歩き始める。

サイレンが近づいている。

「教えといてやる。」

組織と敵対していた奴らが、

組織の残党を吸収して日本で勢力を広げようと動き出した。

おまえも裏の世界じゃ有名人だからな。」

「赤井さんほどじゃないと思うんだけど。」

それにしても高校生探偵も休業していたのに、意外と覚えてるものだな。」

「銃の持てない日本であの組織と遭り合ったなんて、クレイジーを通り越してるとな。」

敵視する組織が日本に來ているという情報を流してくれた。

「今夜のカシスの件はしばらく顔を出すなよ。」

話していた赤井の顔が変わった。

「なぜだ？」

「そのうち分かる。」

いいか、この現場検証にも顔を出すなよ。

おまえが来るとややこしくなる。

いやでもこの事件の中心にいるのだから。」

その鋭い視線に今は逆らうときじゃない。

「わかったから、情報は入れてくれるだろう。」

新一は返事をしないの肩を貸した赤井に発信機を貼り付けた。

話の途中で新出医院に着いた。

普段ならもう診療時間が過ぎて暗いはずの治療室に明かりがついている。

さっきの爆発事件で被害を受けた人達がいたのだろう。

新出先生なら当然の行動だ。

待合室には怪我人が座っている。

新一はホッとして床に座り込んだ。

赤井は新一の治療を頼みに行くと、

診察室から治療を手伝う蘭が出て来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608a/>

泡沫

2010年10月28日08時30分発行